

忌避の思想を克服し 「政治」を創造する

今日の学校現場の悲惨と苛酷（教師の過労死・精神疾患、日の丸・君が代強制、さらには、子どものいじめ・自殺とその隠蔽など）は、日本の「政治」に深く関係する。そうであれば、その政治に向きあう必要がある。

ところが、政治のほうは、「教育の中立性」を禁忌の御旗にして、教育行政への疑問を封じこめようとする。悲惨と苛酷の原因を追求しようとする、追求する途上で、立ち入り禁止地帯に出会うしくみをつくつてしまう。政治は巧妙悪辣である。そして、禁忌の気分が浸透する。

少なくとも教師は、「政治」というものに恐怖を感じている。政治が、職務命令を利用し、恐怖を引き起こし、忌避をまき散らしている。こうして、教師の真実への意欲は断ち切れ、政治への姿勢は遠のいていく。

ここに、今日の「政治と教育」の重要問題がある。

教師や国民が、忌避の思想を克服し、まっとうに政治を語り、子どもが政治的見識や力量を身につけ、「政治」に反撃し「政治」を創造する。そうした教育実践はどうすれば生み出すことができるのか。これが本特集のねらいである。

まずは、沖縄と福島の「怒り」をしつかり受けとめたい。政治と教育の基本課題がここからはじまる。つぎに、子どもとともにある、よく工夫された政治教育の実践を紹介する。教師と子どもの柔らかな政治的感性の形成に気づくだろう。最後に、若者の脱原発デモや団体交渉参加への思いを載せた。若者の政治への向きあい、教育の原点を教えてくれるはずだ。